

Eureka VI

六年制通信 No. 18 平成 30 年 10 月 12 日 (金) 号

一冊の本から

昔『愛情物語』という映画のテーマ音楽がショパンのノクターン 9-2 で、主演のタイロン・パワーが自分で弾いて話題となりました。すごく練習したのでしょうか。この曲は聴いたら、ああこれかと、誰もが思うことでしょう。私は 9-1 の方が好きなのですが、それは学生時代に下宿の先輩から教えてもらって知ったのでした。

クラシックはほとんど聴いたことがなかったのですが、バイオリンの音色はなんとなく好きでした。先輩は壁一面どころか四畳半の部屋中をクラシックのカセットテープで埋め尽くしていて、彼が下宿を去るまでの、ほんの数か月しかなかったのですが、私は毎夜のように押しかけて、勧められるままにバイオリンの曲をいろいろ聴いたものです。メンデルスゾーンやチャイコフスキーは、先輩も好きだったなあ。先日の中学行事で姫野さんの弾いたサン・サーンスも何度も聴きましたよ。

先輩はアイザック・スターンの重厚なバイオリンが好きだったのですが、私は断然ヤッシャ・ハイフェッツでした。ハイフェッツのツイゴネルワイゼンを初めて聴いたときのことは今でも覚えています。のちに 20 世紀最高のバイオリニストと評されている人だと知ったのですが、どんな難曲でも苦も無く弾いたのだそうです。しかもほんの子どもころから。天才なのでしょうね。バイオリンに限らず楽器は幼いころから始めないと一流にはなれないのですね。例外はないのだそうです。そして世界には「神童」と呼ばれる人々がたくさん育ち、その中でまたコンペティションに勝ち抜いて、一流のバイオリニストとなるのでしょう。将棋の名人に似ていますね。それにしても、ハイフェッツは 7 歳でメンデルスゾーンのバイオリン協奏曲を完璧に弾いたというのですから、怖いくらいの天才ですね。「ハイフェッツ症候群」という言葉もあって、同世代のバイオリニストは誰もがハイフェッツに劣等感を感じてしまうことを、そう呼ぶらしい。(ちなみに、ハイフェッツの使っていたストラディバリウス、通称ドルフィンという名器は現在日本にあって、諏訪内晶子さんが使用しています。ちょっと嬉しい)

この、天才ハイフェッツに見出された日本人がいたことを、つい最近一冊の本から知りました。山本茂の『神童』という本です。文庫にはなっていないようで、今では古書店でしか手に入らないかもしれません。神童、渡辺茂夫は昭和 16 年 6 月の生まれですから、生後半年で日本は真珠湾攻撃を行ったわけですね。昭和 23 年、茂夫 7 歳の時、読売ホールにおいてメンデルスゾーンやパガニーニの協奏曲を演奏します。

そのころの日本のバイオリニストたち、そして茂夫にとってもハイフェッツは神様でした。それが何度目かの来日のおり、茂夫に会っているのです。そこからがちょっ

と信じられないのですが、世界中から天才が集う名門、ニューヨークのジュリアード音楽院へ茂夫を無試験で入れるよう、ハイフェッツがお膳立てをするのです。前例はないようですから、むしろハイフェッツの影響力に驚きますが、そうさせた茂夫も天才と言っていいでしょう。14歳で渡米し、技量が抜きん出ていたためジュリアード史上最年少で奨学生に選ばれています。

さて、将来を約束された天才は、しかし、16歳で自殺未遂をし、後遺症で二度とバイオリンを持てなくなります。言葉も失います。58歳で亡くなるまで40年以上を養父母に介護されながら日本で暮らしました。

『神童』には、残された茂夫の手紙や当時かかわった人々から直接聞いた情報が細かく記されており、少しずつバイオリンと距離を取ろうとする茂夫の様子や、米国にうまく適応できない悩みや、恋の悩みもあったことがわかります。やがて、周囲の人々が精神科の診察を受けさせる頃、自殺願望を口にするようになるのです。この本では引き金は失恋だったことになっていますが、本当のところはわかりません。14歳から16歳までの間、実際の彼の内面に何があったのか。友達を作る暇もなくひたすら練習した日本での生活が遠因になっていないのか。どんな理由を考えても、後づけにすぎない気がします。こういった天才の悲劇を読むと、私はただただ悲しくなります。茂夫にかかわった多くの人々もまた、のちに後悔の念に苦しんだはずです。

考えてみると、中学を中退して一人で渡米しているのですよね。天才ゆえに、天才にふさわしい教育を求めなければならなかったのでしょうか。

「その人にふさわしい教育を」というと日本国憲法を思い出します。憲法第二十六条には「すべての国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」とあります。この条文は、誰もが平等に教育を受ける権利がある、というところが強調されますが、本当は「その能力に応じて」と但し書きがついているのですね。ここ、案外指摘されませんが、重要なところですよ。英語だと...correspondent to their ability...です。ということは、高校生はその「能力に応じて」大学へ進学すればいいわけですね。ですから自分の能力を正しく知る必要があるということです。当たり前のことですが、ちゃんと憲法に書いてあるとは（私は仕事から知っていましたが）あまり知られていないようです。

ともあれ、その能力が突き抜けた天才の場合、それにふさわしい教育を、あるいは教育の場を慎重に選ばなければ、私たちには理解しがたい悲劇が生まれることがあることを、私はこの本で知ったのでした。むろん、茂夫の悲劇は時代背景も大きく関係しているでしょう。今なら…、そう考えても仕方ないのですが、もし今なら、もっと違う結果になっていたような気がします。茂夫の弾くメロディーが、ハイフェッツのように、のちの世に残っていたのかもしれない。

私たちは天才ではありませんが、自分にふさわしい、自分の能力にふさわしい教育を見つけるという点では茂夫のような天才と同じです。茂夫の進む道は、彼の才能を信じる周囲の大人が決めました。君たちは自分で選ばなくてはなりません。それは、君たちにとって、きっと幸せなことに違いないと私は思います。